『比較民俗研究』6．1992／9

大ボヤール岩壁画と銅鍑

甲元眞之※

はじめに

国分直一先生は環東・南シナ海周辺の考古学・民族学的世界に御造詣が深いばかりでなく，日本を取り巻く北方的世界への関心も旺盛で，基層文化の北方的要素についての論攷も少なくはない。とりわけ岩壁画については並々ならぬ興味をもたれ，幾つかの論文を発表されている。レナ河流域のスルクタク・ハヤ岩壁画から，「シャーマンの行進」を読み取られた一文などは，その好例である(1)。

我々考古学者が資料として使用する遺物や遺構は，いわば「形」だけのものであり，その用途や機能についての分析は決して簡単ではないし，しばしば錯誤することすらある。岩壁画はその点でも貴重な資料であり，ヨーロッパでは早くから「画像学」の対象として特別な扱いを受け様々な分析がなされて来ている。スウェーデンの岩壁画の犁耕の図から，ヨーロッパ新石器時代の犁の復元とその使用法が確認されたなどは，そうした成果のほんの一例で，失われた世界の具体像を描き出してくれる。そこでここでは国分博士に習って，岩壁画を題材にして考古遺物を検討してみよう。

1

韓国金海市にある大成洞には古代の伽耶地域を代表する古墳群がある。これまでの3次にわたる発掘調査で200基近い墓が明らかになり，その墓の規模と構造，それに副葬品の内容から，古代伽耶王室のロイヤル・セメタリーと想定されている(2)。そのうちの一基，29号墓はこの古墳群の中では3番目に大きい大型の木槨墓で，多数の鉄製品や土器に混じって一点の銅鍑が発見されている。バケツ形をした容器の口縁部に半円形の把手を付けた大変特徴ある遺物である。他の一つは47号墓出土品で2個の半環状把手が付くことは同じであるが，前者に比べやや小さく胴上部がやや膨らむことに特徴が見られる（写真1）。これらと型式的に最も近いものは，吉林省集安県太王郷解放村で発見されている(3)。この大成洞出土の銅鍑と同一の用途と考えられる類似品は，従来から中国の長城以北の地域で点々と出土が報じられていて，漢の植民地であった楽浪地域にも見られることから，内陸アジアと関連する遺物であろうと紹介されてきた。但しその用

※　熊本大学文学部助教授

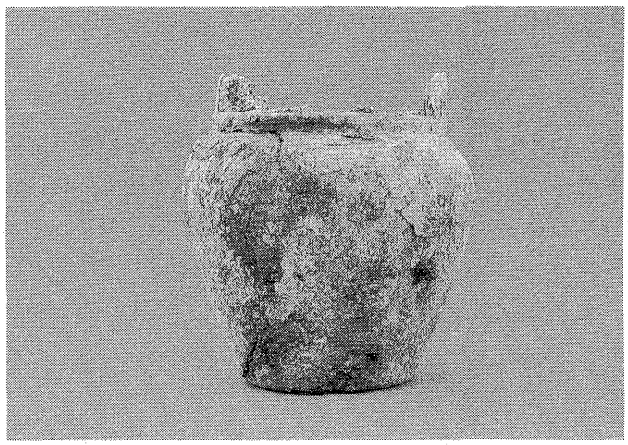


写真１　大成洞47号墓出土銅鍑（申敬澈氏提供）

途に関してははっきりとはせず，ただ単に銅製の容器であろうと推定されるに止まっていた。

こうした特異な青銅容器は，シベリアから中央アジア，西アジア，ヨーロッパにかけての極めて広い範囲から出土が報告されていることは，戦前の学会では知られていたが(4)，その所属する時代については不明確なままであった。それがシベリアでは初期鉄期時代のダカール期に属するものであり，遊牧民の使用する道具の一つであることは，戦後のロシア人の学者などの調査によって，次第に明らかにされてきた(5)。これによってヨーロッパまで広がって行くこの種の容器は本来的に東方産であることが解った。この銅鍑の用途を推定する事ができる岩壁画は，数多くのシベリアの岩壁画の中でも，わずかに大ボヤール，小ボヤール遺跡とキジル・カヤ遺跡の２ヵ所のものだけであり，それ自体大変珍しいことである。

2

大ボヤール（ボリショイ・ボヤールスク），小ボヤール（マラヤ・ボヤールスク）遺跡はイェニセイ河の支流であるスハヤ・テス川の右岸の，トロイツコエ村から６Km 離れた小さなボヤール丘に12Km にわたって続く，デヴォン期の砂石に刻み込まれていて，タガール期特有のペッキング技法によって，当時の人々の生活史が描き出されている。大ボヤールと小ボヤールは約400m ほど離れて存在するが，製作時期はほぼ同じころと見なされている。遺跡周囲には多数の小川が流れ，牧草や耕作地として極めて適切であり，付近にはタガール期の古墳や石像，古代の潅漑用水路や集落跡が発見されている(6)。

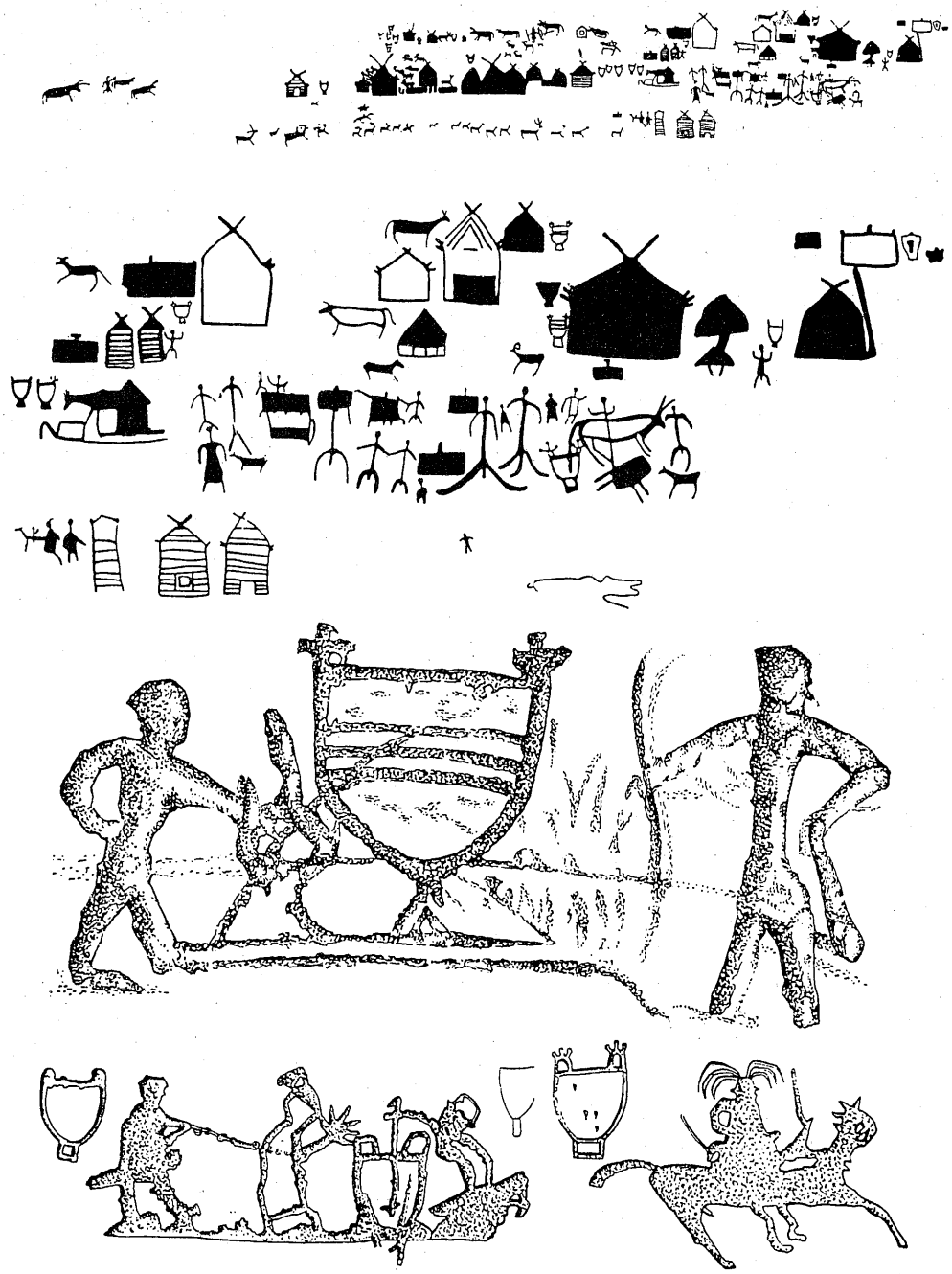
ボヤール遺跡は1904年にアドリアノフによって発見され，彼の残した記録は後にグリャズノフにより公表されたが，それは小ボヤール遺跡のものであり，それよりも400m ほど高所にある大ボヤール遺跡の存在は，1962年までは未知のものであった。その後数回にわたって調査がなされ

たようであるが，詳しくは解らない。今回デヴレットにより報告されたのは，大ボヤールの写真と模写，それに小ボヤールの写真である。

デヴレットの模写によって，大ボヤール遺跡の岩壁画をみてゆくことにする（以下挿図参照)。まず画面中央から右側にかけて，テントを中心とした集落の様子が描かれている。左端には集落に向かう牛３頭を鞭を使って従わせる一人の人物がいる。テントの下部には，馬に乗った３人と鹿に乗った一人が，19匹の鹿を後ろから追いかけている画像が描かれる。集落には25張りの大小取り混ぜたテントがあるが，そのテントの表現において，全面をペッキングによって堀り窪めたものと，横線を入れたもの，あるいは外郭線だけを刻んだものなど，違いを意識したと見られることから，テント相互には用途の違いがあった事を物語っている。しかしその区別を言い当てることは難しい。テントの上段には７匹の羊，６匹の山羊，それに鹿１匹がいて，その上には４頭の牛と１匹の山羊が見られる。牛の間には，棒と弓矢をもった人間と犬が，さらにその右側には馬に乗った人間と，立ち止まっている人間が描かれている。集落の右側には牛や羊が点々とみられるが，人間が集中しているのが際立っている。人間には３通りの表現，衣服を纏うもの，裸のもの，裸でペニスを表したものがあり，それぞれ女，子供，男を言い表すものであろう。するとこの大ボヤール遺跡の岩壁画に描かれた集落には，男性16人，女性９人，子供３人の合計28人が生活をしていたことが窺われる。

この集落にはその他に，光鋩状突起をもった半環状の把手を口縁部分にもつ容器が，テントの周囲などに18個立てられている。胴部が塗り潰されたもの，空白のままのもの，横線が入れられたものと表現の違いが見られるが，その差異は何を意味するか明確にはし難い。これらの容器の用途を推定するときに，その使用法を暗示させるシーンが描かれているのは，集落の右端の状況である。あたかも一人の人間が牛の頭を押さえ，牛の中央に立つ人間がいて，尻尾のところに把手の半環状の付いた容器を立てている。このことはこうした容器が牛，とりわけ乳搾りと関連するものであることを物語っている。

この状況の次の段階を示すものが，キジル・カヤ遺跡の岩壁画である。ここでは中央にこの容器が置かれ，左右になにか仕事をしている二人の人物が描かれている。その容器の周囲には，あたかも炎が燃え盛るような光景が表されている。これを火を燃やしている状況であるとすると，右側に人間は左手に薪をもち,左側に人間は薪を燃やしている姿であろうと想像されるのである。キジル・カヤのもう一つのシーンでは，円盤形をした頭を付けた棒を，こうした容器の中にいれて掻き回している状態が，透視図で描かれている。こうした透視図で場面を表現することは先史時代の絵画にはしばしば見られることであり,別に奇異なものとは思われない。この掻き回すシーンの右隣には不完全に描かれた容器と完全な容器があり，完全に描かれた容器の胴部には，あたかも滴が垂れるように点状の徴が見られる。この絵画が火で暖め，掻き回し，そして冷やすという一連の動作を表現しているものとすれば，さきの大ボヤール遺跡での乳搾りの光景と併せて，遊牧民の間に一般的に見ることができるチーズ作りの状況を表現したものとの想定は容易であろう。



挿図　上二段，大ボヤール岩壁画；下二段，キジル・カヤ岩壁画

この推定が正しいとするならば，半環把手をもつこうした独特の容器は，チーズ作りのための容器であったと比定することができる。遊牧民のあいだではチーズ作りは大切な食料供給の方法であったために，大ボヤール遺跡の岩壁画に描かれた集落図に，18個ものこうした容器の絵が描かれたものと推測が可能となるのである。

大ボヤール遺跡の岩壁画の製作年代について報告者は，岩壁に描かれた様々な図像を手掛かりに推定を行っている。動物たちが跳躍する絵柄は，オルドス地方では紀元前５～３・２世紀に見られ，紀元前２・３世紀の木像やバックル図柄の子羊と共通するという。三つの棒状突起の付いた把手をもつ容器のタイプは，タガール期に見られる銅鍑と一致する。従ってその年代は紀元前1000年期の後半に属する可能性が高い。

テントはユルト（Yurt）の型式で，ハカス（Khakass）族の白樺やフェルトで作ったものに類似するという。ハカス族についてはよく解らないが，テントが円形の構造をなすことから，ツングース・モンゴル系もしくはトルコ系の住民の作りであることが窺われる。あるいは鹿に乗る習慣が見られることから，それらの影響を受けたヤクート人などの系統の民族であったのかもしれない。

3

この容器について頤志界氏は，中国内で発見された新しい資料を基に分類と編年を試みている。頤志はつぎのように３分類した(7)。

Ａ型；釜部分が浅く，口縁部に半環状の把手を付けたもの。これはさらにラッパ状に開く高台をもつものと，透かしをもつ高台の付いたものに分かれる。

Ｂ型；釜の部分が長円形となり，口縁部に半環把手をもつもの，これはさらに高台の付くものと付かないものに分かれる。なかにはリングを通して釣り下げ用の梁が付くものもある。

Ｃ型；釜の部分の口縁が窄まり，胴部に最大径がくるもの。これには高台はつかない。

これらの所属年代については，Ａ型は西周後期から戦国，Ｂ型は前漢末から三国，Ｂ型の一部とＣ型は魏晋から南北朝にかけての時期と想定した。またその分布については，ＡⅠ型は長城以南，渭水以北の東西に長く見られ，ＢⅠ型は長城以北のホロンバイルからオルドスにかけての地域に分布し，Ｃ型は黄河以南の各地に広がっていることを挙げている。この頤氏の分析ではまだ十分に銅鍑の内容を知ることができないので，もう少し立ち入って見て行くことにしよう。

こうした銅製鍑については，江上波夫氏が50年以上も前に分類を試みている。(8)。江上氏は高台をもつものをＡ型式，もたないものをＢ型式とし，把手を１；環状，２；偏平紐状，３；矩形に分けて，それらの組み合わせにより５個の型式に分類した。

ＡⅠは南ロシアや西シベリアに多く，紀元前４・５世紀から紀元後に及ぶものであり，オルドス地方に見られるものは，それからの伝播したものである（ボヤールの岩壁画に描かれたのと同じ形式）。

ＡⅡはオルドスに典型的なもので，その他の地域には見ることができず，ＡⅠ型式のものから展開したものと想定される。

ＡⅢは東方においては極めて類例が少なく，西シベリアからヨーロッパにかけて多く見られるもので，一説にはフン族の西方への移動と関連するものと説かれている。

把手の形状はむしろ中国の銅製容器の作りに近く，ＡⅠ，ＡⅡ型式に中国の銅器の影響を受けて成立したものである。

ＢⅡ，ＢⅢ型式の銅鍑は西シベリアや南ロシアのは全く出土せず，それぞれがＡ型式を模倣して中国北部地域で製作されたものである。

頤氏の分類が時代的な位置付けを重視するのに対して，江上氏のものは分布の違いを強調するものとなっているために，必ずしもかみ合わない。ここでは江上氏の分類が年代的にはどのようになるかの検討を若干行ってみよう。

吉林省楡樹県老河深遺跡の中層では129基の木棺墓が発見されている(9)。そのうち97号墓と56号墓から各一点つづの銅鍑が出土している。97号墓は男女の合葬墓で，銅鍑は男性に伴う副葬品の一つであった。銅鍑は半環状の把手を２個口縁部にもつ，胴上部がやや膨らむ鉢型で，表面には口縁下部に２条と胴中央部に１条の凸稜線が飾られている。この墓からは多数の副葬品が発見されたが，その中に四乳八鳥紋鏡があり，前漢の終わり頃の年代に比定できる。一方56号墓は一男二女の異穴合葬で，性別の記載はないが，武器類を多く出土することから，男性の墓であったと推定できよう。ここで出土した銅鍑は矩形の把手をもち，透かしのある高台をつけたもので，江上氏のＡⅢ型式に当たる。この墓からも銅鏡が一点でている。七乳七獣紋鏡がそれで，同じく前漢の終わりころの年代が想定できる。すると，ＡⅢ型式の銅鍑と江上氏の分類にないＢⅠ式がほぼ同時期に使用されていたことが知られる。

ジャライノール古墳群でも銅鍑が発掘されている(10)。ＢⅠ型式に属す。ここでは方格規矩鏡が出土していて，その年代は前漢終わりから後漢初めの頃のものと考えられる。また二蘭虎溝古墳でも，一点のＢⅢ型式の銅鍑が出土している(11)。この古墳群では日光鏡が発見されていて，漢代でも遡上することも考えられるが，同時に長宜子孫内行花紋鏡もあり，前漢の終わりころまで時代が下がるものと推測できる。補洞溝遺跡の匈奴墓からは鉄製の鍑が発掘されている(12)。ＢⅠとＢⅢ型式のもので，口縁に把手をもたないＡ類型のものと伴出していて，その年代は前漢終わりから後漢初めのころと推定されていることから，上記の諸遺跡の年代と齟齬を来すことはない。するとこの手の銅鍑は，ほぼ同時期に使用されていたことが窺われよう。

中国北部においては漢代を遥かに遡上する時期の銅鍑の例が知られている。それは北京市西抜子村出土の銅鍑で，西周の終わり頃のものと推定されている(13)。高台付きの，口縁部に半環状の把手を持つもので，ＡⅠ型式の中では形態的にも古い。この種の銅鍑は北部中国出土品として，戦前には数多く収集されていて，数量的にみてもこの地域の製品であり，長城周辺での出土遺物が最も年代的に遡上し，この地域で発明された可能性が高いことを示している。西抜子村の銅鍑から，河北省李家荘の銅鍑を介して(14)，漢代のこうした鍑につながるものであり，その出現は

タガール期の銅鍑よりも古いことは言うまでもない。銅鍑の型式と年代を見ると，中国の北部から東北地域の放牧民が，中国の青銅器の製作技術を導入して，独特な容器を作ったのが，こうした銅鍑であったとトレースできよう。

おわりに

大ボヤール遺跡の岩壁画を通して，鍑と呼ばれる特殊な容器が家畜動物の乳製品を作るときの道具であったことが知られるが，それはもともと中国の北方地域で出現し，西方へと伝播して行ったことが分かる。タガール期よりも遡上する銅鍑が発見されたとしても，北方遊牧民の間で流行した有柄式銅剣が実は中国北方で発明され，それが西の方へ広がって行ったことが明らかにされていることからも(15)，シベリアや中央アジア起源とは思われない。シベリアのものは中国北部の半環状把手に棒状の突起をつけるという，特殊な装飾を施したものが盛行し，後に矩形の把手を付けた型式のものが，フン族などの西遷によって西方世界にもたらされたのに対して，東アジアの場合では把手には何も付けない半環状把手から矩形の把手が生まれて，両者が併存し，これらは把手に梁を付けるなどの方向へと変化して行く。

金海大成洞で出土した銅鍑は形態的に老河深遺跡などの中国東北のものと類似する。これら東北地方の古墳では火葬した痕跡が認められ(16)，また馬などの動物を随葬していることは，鮮卑族に属する人々の墓であった可能性が高いと見ることができる。鮮卑は遊牧民であったことが知られていて，銅鍑をもつこと決して奇異なことではない。問題なのはどうしてこうした遺物が伽耶地域の古墳から出土するかという点であり，その考察にあたっては，さらに検討を加えなければならないが，当時は鮮卑と高句麗は友好関係をたもっていて，文物の交流が行われていたことは，集安でも銅鍑の出土することで確認される。大成洞古墳の年代が3世紀終わり頃とすれば，約250年間の伝世を考えねばならず，高句麗を媒介にすると，その間の事情はうまく説明されるのである。

注

(1) 国分直一「スルクタク・ハヤの先史岩壁画」『えとのす』3号，1975年。

(2) 申敬澈「大成洞古墳群の概要」『東アジアの古代文化』68号，1991年，慶星大学校博物館発掘調査団『金海大成洞遺跡』1992年。

(3) 吉林省文物誌編纂委員会『集安県文物誌』1984年。

(4) 梅原末治『古代北方系文物の研究』1938年。

(5) Н. Л. Уленова, Происхождение и Ранняя История Племен Тагарской Купъ туры. Москва, 1967.

(6) M. Davlet, Rock Engravings in the Middle Yenisei Basin. Moscow, 1976.

(7) 頤志界「鄂爾多斯式銅（鉄）釜的形態分析」『北方文物』1986年 3 期。
(8) 江上波夫，水野清一『内蒙古・長城地帯』1935年。
(9) 吉林省文物考古研究所編『楡樹老河深』1987年。
(10) 内蒙古文物工作隊編『内蒙古出土文物選集』1964年。
(11) 注10に同じ。
(12) 田広金，郭素新編者『鄂爾多斯式青銅器』1986年。
(13) 北京市文物管理処「北京市延慶県西抜子村窖蔵銅器」『考古』1979年 3 期。
(14) 鄭紹宗「行唐県李家荘発現戦国銅器」『文物』1963年 4 期。
(15) 甲元眞之「遼西地方における青銅器文化の形成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集，1991年。
(16) 注 9 に同じ。

新刊紹介

島薗進著
『現代救済宗教論』

著者には『現代人の宗教』などの著者のほか，ベラーの『心の習慣』の翻訳があり，最近の新新宗教や宗教ブームも視野に入れた研究を行っている。本書では近代以前の社会において精神領域に独占的な権威をもっていた「救い」の約束，「救い」の追求を核とする「救済宗教」について，その近代以後の社会での方向性を論じている。近代への移行期以後に登場する救済宗教として，文化の大衆化を反映した大衆の宗教すなわち「新宗教」は救済宗教と位置付けられ得る（幕末維新期に発生したとする）。新宗教の信仰や思想の源泉として主として民俗宗教，日蓮宗の在家講，修養道徳運動があり，これと発生の過程に着目した類型が示される。世界の宗教史の流れに位置付けながら，仏教系の新宗教のなかにおける仏教的な救済観の影響と，なぜ日蓮宗の系譜が新宗教の中で大きな位置を占めたのか，大正・昭和期以降の新宗教の特徴，宗教文化の大衆化を考察する。それから近年の日本の新宗教の海外での成功と文化的葛藤の模様や，これからの世界の宗教運動の中でどのような位置を占めるのか，について論じる。近代以降の宗教運動を共同体志向のものと個人主義志向のものに分け，前者に新宗教やセクトが，後者には七〇年ころ以降の新霊性運動が含まれ，時代背景や支持者の階層の違いからこれを区別することが，先進諸国に共通する宗教状況を示す利点となることを述べる。いずれも個々の事例は十分に提示されていないが，注記された文献により検索すればよいのであって，新宗教を通して現在の状況を知ろうとする大きな見取り図を示したものであり，通文化的な概念化をめざす部分には，比較民俗研究にあたって参照すべきものが多い。（古家　信平）

B 5 版　254頁　青弓社
1992年 1 月刊　2400円